

新潟県立近代美術館開館20周年によせて

今年7月15日に新潟県立近代美術館は開館20周年を迎えます。今年度の企画展は6月29日から始まるルーベンス展を皮切りに、8月31日からのオランダ・ハーグ派展、11月8日からの庵野秀明・特撮博物館展、3月1日からの生誕120年岩田正巳展と、充実した20周年にふさわしいラインアップで編成できたと思っています。

ルーベンス展は、17世紀バロック時代を代表する画家ルーベンスと、その画家集団であるアントワープ工房を紹介する展覧会です。動きや装飾性に優れ華麗で重厚な作品は、当時多くの宮廷・貴族が競って収集をしたと言われ、アントワープ大聖堂に残る祭壇画は「フランダースの犬」のネロ少年が憧れ最後に見た作品としても知られています。

オランダ・ハーグ派展は、フランスのパルピゾンで起こった自然主義的な風景画と、その後のオランダのハーグ派の叙情的な風景画の傑作が展覧されます。

館長庵野秀明・特撮博物館展は、昭和から平成の初めにかけて怪獣やスーパーマンなどデジタル時代前に映画やテレビで使われた精巧なミニチュアの世界を全館で再現し、観客が主人公になって体感できる男の子必見の展覧会となるでしょう。

また岩田正巳展は、今年8月に生誕120年を迎える三条市出身の日展作家で日本芸術院会員岩田正巳の画業の集大成とも言えるべき展覧

会です。
近代美術館の累計入館者数は、平成24年度末までに企画展だけでも220万人を数え、コレクション展、毎年共催している県展の巡回展、ジュニア展、教育普及活動などを加えるなら



近美20歳 新たな物語の 始まり

ば、県民人口をはるかに上回っていることは間違いないです。

この20年間の企画展の入場者ベスト3は、昨年1月15日まで開催された「借りぐらしのアリエッティ×種田陽平展」が1位で17万5千人、2

位が平成11年の「パリ・オランジュリー美術展」で16万1千人、3位が平成22年の「奈良の古寺と仏像展」の13万5百人です。

収集されているコレクションは、県民会館内にあった県美術博物館時代からの県ゆかりの作家の作品、昭和56年度に購入した大光コレクション、前川初代館長の時代を中心に収集した海外作品などを加え5,681点となり、質量とも全国的にも屈指のコレクションです。しかし平成16年からは収集基金が事実上使えない状況となり、近年の収集作品の大半は寄贈となっています。すぐれた美術作品を県民の財産として後世に残し伝えることは美術館の使命であり、体系付けた収集は未来への責任でもあります。

また、学校教育の美術教育時間減少などにより、美術・芸術に対する感性を養い育てる役割を、美術館が教育界と連携して果たさなければならぬ時代になったと思っています。さらに高齢化時代を迎え生涯学習が重要となり、教育普及活動も多様な手法が求められています。

美術によって生活の中に潤いと美の感動を伝え、心の豊かさを育む機会を提供する役割を美術館は担っています。近代美術館が県内におけるその中心的役割を、これからも積極的に果たして行かなければならないと、20周年にあたり決意を新たにしています。

(館長 徳永健一)

ルーベンス

栄光のアントワープ工房と原点のイタリア



ペーテル・パウル・ルーベンス(ロムルスとレムスの発見)
1612-13年頃、ローマ、カピトリナ絵画館蔵
©ROMA CAPITALE-SOVRINTENDENZA
BENI CULTURALI-MUSEI CAPITOLINI

近代自然主義絵画の成立
オランダ・ハーグ派展



ヤコブ・マリス(漁船)1878年
ハーグ市立美術館蔵
Collection Gemeentemuseum Den Haag,
The Hague, The Netherlands

館長 庵野秀明 特撮博物館



「巨神兵像」竹谷謙之助
©2012二馬カ・G

岩田正巳展



岩田正巳(英名を渡る第九郎義経)1936年
当館蔵

20周年
関連イベント
開催!

1993年7月15日に開館した新潟県立近代美術館は、今年おかげさまで開館20周年を迎えます。近代美術館では20周年にちなんで、さまざまな催しを行っていきます。美術館案内、HP等でもお知らせしていきますので、お楽しみに。

- 4月23日(火)～5月8日(水) 開館20周年ロゴマーク展 ※長岡造形大学学生作品120点を展示
- 7月 6日(土) 14:00- 美術鑑賞講座 開館20周年①「新収蔵2003-2012 この10年をふり返る」
- 7月27日(土) 14:00- 美術鑑賞講座 開館20周年②「近代美術館の名品から」
- 7月15日(月・祝) 開館記念日はコレクション展が無料! ※コレクション展第2期が対象となります
- 7月 3日(水)～7月23日(火) 開館20周年記念 ポスター展 ※2階ギャラリーで開催 入場無料
- 10月29日(火)～2014年1月26日(日) 第4期コレクション展が無料! ※2階ギャラリーで開催

2月某日、藤田裕彦学芸課長、松矢国憲専門学芸員、宮下東子課長代理という開館以来のベテラン3名に、最若手にして雪椿編集長伊澤朋美美術学芸員が本誌独占突撃インタビューを行いました。

伊澤(以下伊) 思い出の展覧会を教えてください。

藤田(以下藤) 「佐々木象堂と工芸のモダニズム展」、最初の展覧会でしたね・・・思い出が一番深い。工芸を初めて担当した展覧会で、しかもチーフで、いきなりだった。タイトルも「新潟の金属工芸」。そう決まってるっていうのに、前任の方は異動されていて、内容が何にも決まっていなかった。でも展覧会の時期は迫ってくるし、何していいかわかんなくて。

宮下(以下宮) 樋田(豊次郎)先生が監修に入られているけれどそれは何故?

藤 「郷土が生んだ美の先達25人展」という、美術博物館の最後の展覧会があった。

宮 それ私たちも担当だった。

藤 そう、作家を分担して。私工芸だったんで、そのときに佐々木象堂が入ってて、面白いなあって思って。そのときに相手してくれたのが、当時東京国立近代美術館にいた、樋田さんで、今はそれこそ秋田の(公立美術工芸短大)学長になられた方で、すごくよくしてくれて、借りに行ったときに詳しく話を聞いて、思い出じゃなくリベラルに工芸ってこういうものだっていう話をしてくれたんですよ。

とにかく佐々木象堂であれば大丈夫だと思った。なぜかっていうと宮田藍堂家の直系の先生に当たるのと、人間国宝だったから。ただ工芸をやられて言われたばかりで象堂の展覧会を一人でできるほど知らないから、自分のフィールドに持ってくるしかないっていうので、相談した。そしたらこういう方向があるよって。はっきりいうと、私だけのものというよりは・・・樋田さんの助けがなければ全然できなかった展覧会だし、個人の方から作品をお借りしたのもこれが初めてで。

宮 ああ・・・私それで秋まで行ったんだよ。

藤 そうそう「猿置物」を借りに行ってもらった。工芸って個人の方が持っていることが多いんですよ。美術品としてでなく家宝としてとても大切にされているんで、電話で借用をお願いすると最初は必ず断られるんですよ。電話するたびにブルーになって。

もちろんその後に行った展覧会のほうがうまくいっているものもあるんですが、いろんな思い出

が詰まっているので・・・原点ですね。忘れられない。これでいろいろ覚えたのもあるし、一人じゃ何もできないっていうのも。やっぱりいろんな人のネットワークがあって。

宮 それを借りに行ったときにさ、山口のほうって女性一人だと泊めてくれないの。それで困って困って(笑)。

伊 宮下さんの思い出の展覧会は?

宮 ある日お偉いさんにちょっと来なさいって呼ばれて、なんだろうって思ったら、海外出張行けて急に言われて。作家インタビューしてこいって。

私より一年前に入った大変優秀な学芸員がいて現代美術専門で、その人が行く予定だったのが、突然辞めることになったから、あんたが一番ヒマだからって。パスポートも持ってなかったんですよ。でも、行くのが10日後だった。

伊 えー!!!

松矢(以下松) そんな話ばかりだよ。中国行かされたときもそうだった。

宮 そうそう。でいきなり行って。だって、私、ね、日本画描いてただけの人ですよ、はっきり言って。学校の先生になる勉強していた人が、この美術館に入って、コンセプチュアルアートの作家から聞いてこいって・・・

伊 キンビに入られた年に?

宮 開館年の3回目の展覧会。これ巡回展です。で全部いろんなことが決まってるベルギーに行くメンバーも全国各地から。だから空港でその人たちと初めて会って。

伊 宮下さんの一番印象深いのは最初の自主企画「絵本と絵巻」展?

宮 いや、・・・今話してみたらこのベルギーだったって(笑)。そうだ、そんなことあった、っていう。

松 この展覧会、手伝ったよね?

伊 お二人のチームは?

宮 初めてですね。借りに行ってもらったんですよ。

松 絵巻物借りに行かせられたんだよ、絵巻。自分でこうやって(絵巻を巻く身振りをしながら)ちゃんとできないと。練習していったさ。

宮 絵巻はね、業者さんにさせないで自分でやんなさいって言われて。東近美[東京国立近代美術館]に返しに行ったとき、一生懸命こうやって巻いたら(絵巻を巻く身振り)、(相手の学芸員が)あ～あ～いいですよ～私がやりま～ずっていってしゅしゅしゅしゅしゅ、しゅるしゅるしゅるしゅる、すたっ。手品みたい!!って(笑) 思って。(藤・松うなずく)

松 そういうのやってるから、もうなんでもこ



— あの日のとき —

学芸員イ





・キンピの20年 インタビュー



いって。作品かまうのはね。

伊 この三人で一緒に展覧会をやったことは？

藤・松 ないですね。

伊 やっぱGUN展が。

藤 言われてみればそうですね。宮下さんと組むこと自体、「郷土が生んだ〜」以来2度目。

松 だいたいね、同じ年代では組んでない。年長者と組んだりっていうのが多かったよね。これ(絵本と絵巻)のときは珍しい組み合わせだったけれども。

藤 GUN展も前任者の異動がなければこの二人(藤・宮)ってまずなかった。時間がないし、とりあえずベテランの人にふるしかないから。今この三人で組むことってたぶんないですよ。年齢が一緒だから、今までは年長者とでしたけど、今度は若い人と組むほうが、自分たちがかつての先輩方の年齢になっちゃってるから。

伊 偶然が重なったのかもしれないけれど、組むことになってみてあらためてお互いのお仕事ぶりは？

藤 私の立場から言うと、これはもうはっきり言えるんですけど、こんなに安心できるものはないですよ。どういう動きをされるかわかってるし、任せとけば大丈夫っていうのもわかってるし。GUN展も個人の方も多かったので、個人宅に連絡するのがどうかっていうのもわかっている。本当に短い時間で展覧会ピンチだな、と思いながら、松矢さんには、特に集荷に行ってもらって、アクシデントがあってもその場その場で判断してもらえるから、こっちに連絡がなくても、どんどん進めてもらえたし。

宮 松矢さん、行ってもらって助かりましたね。

松 携帯電話持ってないから(一同笑)。何の連絡もしないで。終わりましたの連絡もしないで(笑)。

藤 もちろんね、GUNの全貌という点ではいろんな足りない部分もあったんだけど、それはもう認めた上で。とりあえず展覧会のかたちにできたというのは、たぶんこのスタッフでないとできなかったなあと思いますよね。やっぱり展覧会ってその人間がすごく思い入れを持ってやってるものだから、その思い入れによって本来持っているエネルギー以上のものができるはずなんですけど、その人間が異動してしまうと……うん。松矢さんとたまに話んですけど、われわれにアドバンテージがあったなあと思うのは、これ(象堂)なんて私入って1年目の展覧会じゃないですか。普通27歳の新人に自主企画を任せないでしょ、おっかなくて。宮下さんみたいに、現代美術やってない人間にいきなりベルギーになんか行って原稿

書けとはしないし。それは今までの組織が大きくなって展覧会数が年間1、2本しかしてなかったのが、いきなり5本ぐらいになっちゃって。

松 それもみんな「自主企画」。それ以外はしない、っていうようなスタンスだったからね。

藤 そう。そうすると採用のあった人間に有無を言わず、なんか考えろってくるんですよ。すごいびっくりすることだし、だからよくやってこれたっていうのもあるし、どう失敗してもおかしくなかったんですけど。そういう意味ではすごい勉強になったし、でもそれやれたっていうのは、よかったですね。今時代は逆に、巡回展が主で、そうしないと展覧会が回らない。

宮 お金も回らないしね。

藤 そうそう。その代わり自主企画は年間一本できるかできないか。だから、そういうチャンスは何とか作ってあげないと。

伊 松矢さんの自主企画は「戦後の書・その一変相 江口草玄」展が原点。

松 今につながってますよ、松矢はこういう書ばかりだった(笑)。

藤 そういうと、私これ(象堂)やったじゃないですか。松矢さんこれ(草玄)やって、そのあとで桐原さんが「インサイド/アウトサイド」ってやったんですよ。この3つがキンピの中で一番入らなかった展覧会だった。それでその後よく言われました。この三人の展覧会、入らないって。

宮 でも(「インサイド/アウトサイド」)いい展覧会でしたよ、すごく。

藤 桐原さんのやった最初の展覧会ですよ。自主企画。

宮 一所懸命考えてね、「考えなきゃいけない」と思って。自主企画やんなきゃ……。

松 みんな忙しそうにしてるから、俺、「すみません、お願いします!」って手挙げて、じゃあって草玄展(笑)。

でも自主企画を手がけて展覧会を組み立てる大変さを身にしみてるんだよねえ。

伊 みなさんのいろんなエピソードを聞くと、もっと聞きたいくらいなんですけど、時間が足りなくて……お話を聞かせていただきありがとうございました。

会話に登場した思い出の展覧会たち

- (図版あり)
- ◇佐々木象堂と工芸のモダニズム展(1994年)
- ◇ベルギー現代美術展(1993年)
- ◇絵本と絵巻(1999年)
- ◇戦後の書・その一変相 江口草玄(1996年)
- (図版なし)
- ◇郷土が生んだ美の先達25人展(1992年)
- ◇インサイド/アウトサイド(1998年)
- ◇GUN一新潟に前衛があった頃(2012年)

学芸員になって初めて担当した展覧会が「ボテロ展」(1997年)でした。

あの何ともふくよかな人物像がトレードマークの作家です。私の専門とはことなる分野(コロンビアの現代作家)で、正直とまどいでしたが、学芸員は何でもこなさなくてはならない職業だと割り切って取り組みました。東京で図録会議なるものが開かれたときも、「何か仕事とっておいで」と館から送り出されたので、会議の席では作家の年譜を作成するというお役目を素直に引き受けました。幸いマルポー・ギャラリーというボテロと長い付き合いのある画廊が、作家に関する国内外のさまざまなスクラップ資料を提供してくれました。過去に作成された年表を土台にして、新しい要素を盛り込み、年譜づくりを順調に進めることができました。唯一ひっかかったのは、図録会議の席で展覧会の企画元である読売新聞社から言われた「年表作成のためにボテロ本人に質問があったら取り次ぎますよ」という一言でした。作家に質問しなくても年表を仕上げることは十分可能と思われましたが、折角頂いた機会をムザムザ無駄にするのも惜しい、という訳でボテロへの質問をどうするかについて結構悩みました。貴重なワンチャンスでした。

年表づくりの仕事に携わるなかで、私はボテロのユニークな作品の面白さに開眼し、特にニューヨークのパーク・アヴェニューやバリのシャンゼリゼのど真ん中に巨大な彫刻群を

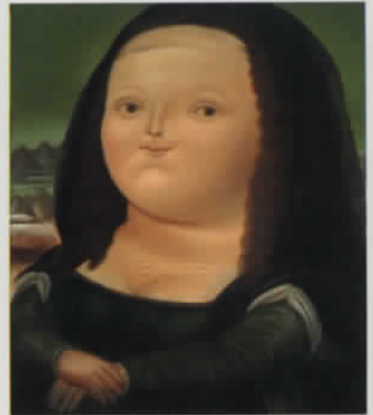
堂々と並べたストリート展の記事に魅了されていました。人間ってこんなに自由だったの?と度肝を抜かれるぐらい大らかな光景です。次第に、彫刻について問うてみたいという気持ちが湧いてきたので、「モニュメンタルな彫刻にブロンズを素材として選ぶ理由は何ですか?」という質問を投げてみました。

この質問を送って肩の荷が少し下りた感じがしたのですが、驚いたことに、すぐにファックスで他ならぬボテロ本人からの返事が画廊を経由して長岡に届いたのです。その答えは、こうでした。

「ブロンズは彫刻の素材の中で、最も美しく、最も高貴で、芸術家の意図に敏感に反応してくれるものです。金属の酸化から生じる緑青には大きな可能性があります。ブロンズの表面に光が戯れることによって深い影が生まれ、その中に神秘的な感覚が醸し出されるのです。」

私の素朴な質問に対して、まるで詩のように美しい言葉が作家から返ってきたことに感動しました。ボテロからの贈り物のように感じられたこの文章を、最後に記して年表を完成させました。その後、ボテロ展開催を機に、出品されていたブロンズ彫刻《母性》が当館の所蔵品となりました。現在も来館する方々をエントランス前で朗らかにお迎えています。色々な図録の仕事を担当しましたが、忘れられない思い出の一つとなっています。

(学芸課長代理 平石昌子)



ボテロ展覧会会図録(1997年)



美術館入口で来館者を迎える《母性》(1989年)

近美のはじまり

一日のスタートは朝会から

8:30事務室にて、8:45エントランスにて、美術館スタッフによる朝会を行います。「おはようございます。○月22日、今日は保育園25名、美術教育研究会21名が来館くださいます。博物館実習と高校の職場体験があります。出前講座のため小学校へ出張します。ギャラリーでは大学生によるワークショップが行われます…」



県民に愛される美術館であり続けるために、こうした情報の共有は必須です。全スタッフの共通理解に基づいた協働により、美術館の新たな物語が紡がれています。

(学芸課長代理 佐藤久美子)

編集部からのひとこと

20周年という記念すべき年を迎え、ベテラン学芸員にこれまでを振り返ってもらいました。1時間という限られたインタビュー時間のなかでしたが、さまざまな想いを聞くことができました(実は、誌面の都合で掲載されなかった部分の方がずっと多いのです…)。雪椿通信も40号という節目になります。これからも美術館と子ども、雪椿通信をどうぞよろしくお願いします。

(美術学芸員 伊澤朋美)

お世話になってますシリーズ

その3

プロジェクター

講堂のプロジェクターが最新式に変更!!



昨年度、講堂のプロジェクターが最新のものに変更になりました。性能を比べてみると、次のような違いがあります。()内は、以前のものです。

- 明るさ……7,000ルーメン(2,000ルーメン)
- 最大対応解像度……1,920×1,200(1,400×1,050)

このように、これまでのものの約3倍の明るさで投影できますし、画像もクリアになりました。さらに、映写室から投影できることで、講堂をこれまでよりも広く使用できます。これからも映画鑑賞会や美術鑑賞講座・講演会等で、液晶プロジェクターは大活躍してくれることでしょう。

(前学芸課長代理 佐藤克己)

新潟県立近代美術館だより 雪椿通信 第40号

編集・発行 THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART
新潟県立近代美術館

〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14

TEL0258-28-4111(代) FAX0258-28-4115

http://www.lalanel.gr.jp/kinbi/ e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

制作・印刷

株式会社 山田写真製版所 〒950-0064 新潟県新潟市東区松島1-5-14

発行日

2013年4月14日